

平成27年度 JACET 中国・四国支部 春季研究大会プログラム&発表要旨

日時：6月6日（土）13:00 ～ 受付

場所：広島工業大学（〒731-5143 広島県広島市佐伯区三宅2-1-1）

Nexus 21 1005教室・1006教室

13:00 ～ 受付 (Nexus 21 10階 1005教室前)

13:30 ～ 13:50 支部総会 (1005教室)

司会 平本哲嗣 (安田女子大学)

13:50 ～ 13:55 開会式

開会の辞

支部長 松岡博信 (安田女子大学)

大会実行委員長 堀部秀雄 (広島工業大学)

(休憩 5分)

14:00 ～ 17:20 研究発表 (1005 & 1006教室)

第1室 (1005教室)

発表1：ホーソンの「あざ」における文化と人称代名詞

(14:00-14:30)

藤居真路 (広島県立尾道商業高等学校)

発表2：オープン・ボイス：スピーキングの練習とテストのためのサイト開発

(14:30-15:00)

松田雅子 (岡山県立大学)

ジュディス・三上 (岡山県立大学非常勤講師)

アンドレア・宮田 (海外コネクション)

発表3：“Teaching English in English”—大学英語教育の現状と今後の予想—

(15:00-15:30)

岩井千秋 (広島市立大学)

(休憩：15:30-15:50)

発表4：大学における OPIc(Oral Proficiency Interview by computer) の活用シーンと英語コミュニケーションスキルの実態

(15:50-16:20)

八木智裕 (NEC マネジメントパートナー)

発表5：「教室内英語タスク別評価尺度」の開発

(16:20-16:50)

池野修 (愛媛大学)

中田賀之 (同志社大学)

木村裕三 (富山大学)

長沼君主 (東海大学)

発表6：OPP イベントを通じた協働学習活動とその教育効果

(16:50-17:20)

三熊祥文 (代表者 広島工業大学)

岩井千秋 (広島市立大学)

二五義博 (海上保安大学校)

三宅美鈴 (広島国際大学)

山中英理子 (広島国際大学)

吉本和弘 (県立広島大学)

堀部秀雄 (広島工業大学)

平本哲嗣 (安田女子大学)

第2室 (1006教室)

発表1：洋楽を外国語教育の教材として活用する可能性について—英語に苦手意識を持つ大学生を対象とした授業実践報告—

(14:00-14:30)

西川憲一 (岡山理科大学)

発表2：話し言葉コーパスを用いた日本人英語学習者向け語彙リストの分析

(14:30-15:00)

山本五郎 (広島大学)

発表3：Moodle・WBT・反転授業による学習者主体のライティング授業の試み

(15:00-15:30)

榎田一路（広島大学外国語教育研究センター）

（休憩：15:30-15:50）

発表4：ピア・フィードバックを活用したライティング指導

(15:50-16:20)

奥田利栄子（広島大学・広島修道大学 非常勤講師）

発表5：The American Heritage First Dictionary の語義と連想について

(16:20-16:50)

田淵博文（就実大学）

発表6：英語学習初期段階における発音到達度指標の提案—日本語母語話者のための「英語音声
共通参照枠」の構築に向けて—

(16:50-17:20)

上斗晶代（県立広島大学）

17:20 ～ 17:25 閉会式

閉会の辞

副支部長 岩井千秋（広島市立大学）

18:15 ～ 20:15

懇親会：「はなの舞」（JR 五日市北口徒歩1分）

会費：4,000円

研究発表 要旨

第1室 (1005 教室)

発表1：ホーソンの「あざ」における文化と人称代名詞

発表者：藤居真路（広島県立尾道商業高等学校）

英語教育では、国語教育と異なり、易しく書き直された書物を通して小説や随筆を楽しむ経験を積みながら本格的な小説や評論へと読書を広げていく指導が見られなくなってきた。他方、文学作品には、無意識的に行われる隠された文化が随所にちりばめられており、国際理解や異文化コミュニケーション能力を伸長させる教材としての価値の高さが再認識されるようになっている。

本研究では、文学作品として人気の高いホーソンの「あざ」を取り上げる。この作品は、多くの視点から解釈されており、例えば大井 (1982) は作品が書かれた時代背景を考慮に入れた解釈を試みている。本研究では、その解釈に文化的な解釈を加えることを試みとともに、文化的な知識の重要性を再確認した。

その上で、人称代名詞自体が元来空間上の距離を指すものであるが、この作品の人称代名詞の関係について、文化的観点による解釈を加えることを試みた。また、こうした人称代名詞の関係が存在するとすれば、使用されている人称代名詞の使用パターンは、物語の展開のパターンと深い関係にあると考えられる。そこで人称代名詞の使用と物語の展開との関係について探求し、その関係がもつ意味について解釈を試みた。

このことをもとに、「あざ」を通して、英語教育における文化的側面の教育の重要性を再確認するとともに、英語教育における文化的側面の教育の面白さと必要性について言及したいと考えている。

発表2：オープン・ボイス：スピーキングの練習とテストのためのサイト開発

発表者：松田雅子（岡山県立大学）

ジュディス・三上（岡山県立大学非常勤講師）

アンドレア・宮田（海外コネクション）

岡山県立大学では、今年度から1年生と2年生を対象に、英語高度化プロジェクトを開始した。1年生の場合は、スピーキング力養成のための音声訓練とオリジナル・スピーキングテスト（オープンボイス）の開発を組み合わせ、スピーキング力の向上を図っている点が、目新しいと言える。

まず、e-learning『発音検定』を導入し、発音・音読練習に取り組むことによって、プロソディック感覚の定着をはかった。同時に、教員と非常勤講師のチームでスピーキングの練習とテスト

のために、オープン・ボイスを開発した。学生は、同サイトにアクセスし、スピーキングの練習を重ね、教員に送信する。その後、テスト期間を設定し、スピーキングテストを実施した。実際に学生が話すのは、6つのトピックについて、7分間程度である。

トピックはCEFRのA1とA2を参考にして11を選び、採点は、ルーブリックの評価基準をもとに各担当教員が行った。本発表では、オリジナル・スピーキングテストの開発と実施について報告する。

発表3：“Teaching English in English”—大学英語教育の現状と今後の予想—

発表者：岩井千秋（広島市立大学）

高等学校学習指導要領の改訂・施行に伴い、平成25年度から高等学校では基本的に「英語授業を英語で」教えることとなった。その実態には学校によってかなり温度差があるようだし、この基本方針そのものの是非についても様々な意見がある。一方で大学にとってこの文科省の決定は対岸の火事ではなく、来年度（H28年度）から新課程で教えられた高校生が大学に入学してくることから、今後、大学英語教育にも大きく影響することが予想される。

そこで筆者は4大学に所属する7名の大学英語教員と、研究プロジェクトチームを平成26年度に立ち上げた。その名はProject TEE (Teaching English in English)である。参加大学は国公立のバランスと収集できるデータ数を念頭に、JACET中国・四国支部内にある1国立大学、2公立大学、1私立大学で構成することとした。プロジェクトでは新課程で学んだ高校生が大学に入学する前後のそれぞれ2年間、合計で4年に亘る経年調査を計画している。その主目的は、1) 英語で英語を教えることがどの程度実践されているか実態を明らかにすること、2) 英語が英語で教えられることや教授言語として日本語が併用されることに対する学習者の意識にどのような変化が生じるかを分析することである。現在はこの研究の2年目にあたり、アンケート調査、授業観察、授業担当者へのインタビュー調査を実施し、定量、定性の両面から収集データを分析しているところである。

現時点ではまだ初年度のデータの一部しか分析を終わっていないが、筆者たちは今後も継続してこの研究の状況をこの学会で発表することを望んでおり、その第一弾としてTEEプロジェクトの構想、今後の調査を通じて期待していること、また予想されることを発表し、参加者の皆さんから意見をいただくことで、今後の研究の参考にさせてもらいたいと考えている。

発表4：大学におけるOPIc (Oral Proficiency Interview by computer) の活用シーンと英語コミュニケーションスキルの実態

発表者：八木智裕（NECマネジメントパートナー）

企業が求める「英語スキル」とは、どのようなものか？また、大学が目指すレベルはどのよう

なものか？いずれにおいても、実務場面で「英語」をコミュニケーションツールとして「活用できる」レベルにあることをどのように測定し、スキルアップに向けたモチベーションと継続的な学習環境をいかにして獲得または提供するべきかを考察する。

大学における OPIc 活用事例としては、授業や留学前の受験で、現状スキルの把握と到達目標の設定を行い、事後受験の際、スキルアップを実感することで、さらなる学習意欲を高めるとともに「なりたい自分」や「必要と思うレベル」の指標を持つことの重要性を唱えてきた。

受験前にアンケートを実施するときには、自己分析に苦慮する姿を目にする。また、受験後の感想では「話したいことを英語で表現できず歯がゆい、もっと話せるようになりたい」「話題作りが難しい」といった声を耳にし、こういった実態に気づく好機であったという感想が多い。

事後受験では、意識的にコミュニケーションをとろうとチャレンジした経験が自信となって、声も大きくより積極的な受験姿勢が見られる。

本稿では大学をはじめとする教育機関での OPIc 学内実施を通じて見えてきた評価レベルの実態と、アンケートから得た生の声・学習者の思いを考察するとともに、授業の一助としての活用を提案したい。

発表5：「教室内英語タスク別評価尺度」の開発

発表者：池野修（愛媛大学）

中田賀之（同志社大学）

木村裕三（富山大学）

長沼君主（東海大学）

本発表では、「英語教師に求められる英語」の評価ツールとして開発した「教室内英語タスク別尺度」について報告する。英語教師に必要とされる英語力は、例えばビジネス関係者に求められる英語力とは質的に異なるはずであり、また、英語 NS による「正しい英語」が必ずしも「言語習得に効果的な英語」という訳でもない。このような問題意識を背景に、我々は、英語教師の教室内英語を評価するためのツールとして、統合的診断尺度、内省的分析尺度、機能別尺度、タスク別尺度という4つの評価尺度の開発を行ってきた。本発表では、これらのうちタスク別尺度（開発中）の考え方と特徴について議論する。タスク別尺度が記述の対象とするのは、英語授業において教師が英語で行うことを期待されている活動（＝英語教師にとっての *real-world tasks*）であり、「音読指導」「新出文法の（口頭）導入」「オーラル・サマリー」などの10の活動を対象として、それぞれに特有な言語使用を中心に記述を行っている。評価の観点には、(1) 英語の質、(2) 語りの工夫、(3) 学習者を意識した言語使用という3つであり、それぞれの観点から言語使用を4段階で評価する。評価尺度という名称ではあるが、教師英語の評価そのものが目的なのではなく、この尺度の活用を通して、「効果的な言語使用」について英語教師の意識を高めることがねらいであり、教師自律性支援のためのツールである。

発表6：OPP イベントを通じた協働学習活動とその教育効果

発表者：三熊祥文（代表者 広島工業大学）

岩井千秋（広島市立大学）

二五義博（海上保安大学校）

三宅美鈴（広島国際大学）

山中英理子（広島国際大学）

吉本和弘（県立広島大学）

堀部秀雄（広島工業大学）

平本哲嗣（安田女子大学）

JACET中国・四国支部では7年前にOral Presentation & Performance (OPP) 研究会を発足し、大学間連携による口頭英語の発表イベントを毎年実施してきた。その目的は、教師側にとっては英語のスピーキングやプレゼンテーションの指導技能を高めること、学習者側にとってはオーセンティックな発表の場を踏むことであり、それを意識しながら学習者同士が連携し、教師と一体になって日常の学習活動に取り組んできた。2014年度末までに計6回のOPPイベントを開催、この間、参加大学や参加者数も順調に増え、支部研究会としてその活動も定着してきた。回を重ねるに連れ、教員は指導を工夫し、それを他の参加教員と共有することで発表内容も随分洗練されてきた感がある。さらに、学習者が生き生きと学習に取り組む姿はほぼすべての参加教員が実感するところである。

しかし、これまではOPPイベントの開催に精一杯で、その教育効果を検証するには至っていなかった。そこで、OPP研究会では2014年度のイベントの前後で参加学生を対象とするアンケート調査を実施することで実証的な観点からこの活動の教育効果を検証することとした。その結果、英語学習の方法や取り組みの姿勢にかなりの効果が見込めることが裏付けられた。本発表では、OPPの活動の紹介と併せ、こうした検証の結果を踏まえ、協働学習によるOPP活動の意義について考える。

第2室

発表1：洋楽を外国語教育の教材として活用する可能性について—英語に苦手意識を持つ大学生を対象とした授業実践報告—

発表者：西川憲一（岡山理科大学）

外国語教育において洋楽を教材として活用するという試みは古くから広く行われており、実践報告も多くなされている。実際、中学校・高等学校の英語教科書において英語の歌が取り上げられる例は珍しくなく、授業の一部として用いられることもある。しかし、英語の歌の有用性を認めて広く活用されているとはいえ、その多くは授業の雰囲気作りや授業中の息抜きというように、英語の歌の教材としての価値が必ずしも現場教員に認識されているとは言えない。中学校・高等学校においては検定教科書であるため歌を主体として利用することが困難だが、大学用テキストにおいては自由な記述ができるため歌の利用は可能であり、実際に歌を利用したテキストも出版されている。

また、大学の大衆化に伴って昨今多くの大学において学生の学力低下が喫緊の問題となり、大学での学びへと誘うためにさまざまな取り組みがなされている。本学においても学習支援活動を行っており、筆者も学生の学習相談などの学習支援活動に関わっている。さらに、本年度筆者は英語を最も苦手としている学生のクラスを担当しているが、彼らに言語や異文化への関心を持たせ、少しでも英語学力改善を図り、その後の学修に導くことを念頭に、洋楽を外国語学習の教材として積極的に活用した授業展開を行っている。本発表ではその授業実践について紹介し、洋楽を教材として英語学力改善に活用することへの可能性について話題提供を行う。

発表2：話し言葉コーパスを用いた日本人英語学習者向け語彙リストの分析

発表者：山本五郎（広島大学）

本発表では、英語のオーラルコミュニケーション力養成のための語彙リスト開発に向けた研究の一環として、中学学習指導要領で指定されている必修語と、主に英語映画の台詞から構築した話し言葉コーパスに基づく出現頻度順語彙リストを比較しそれぞれの語彙リストの特性について分析する。研究の目的は、日本人英語学習者が文部科学省検定済の教科書を通して学ぶ語彙が、英語による日常会話で高頻度に使用される語彙をどの程度反映しているのかという点について、コーパスの比較分析を元に明らかにすることである。

また、語彙リストの比較分析に合わせて、2012年度から全面実施となった学習指導要領の改訂ポイントを踏まえて英語学習の目標を概観し、オーラルコミュニケーション力をはじめとする実践的な英語力の習得が求められている日本の英語教育の背景についても考察する。

発表3：Moodle・WBT・反転授業による学習者主体のライティング授業の試み

発表者：榎田一路（広島大学外国語教育研究センター）

本発表では、発表者が2014年度前期に、広島市内の私立大学英文科1年生（2クラス、計50名）で行った英語ライティング授業の実践を報告する。同授業の目的は、本格的なパラグラフ・ライティングを行うための準備段階として、英語の文法・構文の基礎を復習することにある。一方、同学科の授業は英語を使用言語とすることが定められたため、日本語による文法解説を行わないこととなった。そこで、この条件下で上記の目的を達成するため、CALLおよびICTを最大限に利用することとした。具体的には、以下の3点を実践の柱とした。1) CALL教室では英作文自動添削用のWBTシステム「サッと英作！」により大量の和文英訳を効率よく行った。2) 授業中は文法解説を行わない代わりに、宿題に役立つ文法ポイントを解説したビデオを作成し、Moodleによる反転授業を試みた。3) 文法解説を省くことで浮いた授業時間を、ペアワークや動画制作など学習者主体の活動に利用し、その成果物をMoodle上で共有することで、学習者同士の学び合いを図った。

発表では、まず実践の目的と概要を説明した後、Moodleの授業ページや学生の制作した動画等を紹介し、文法に関する事前・事後テストの結果、反転授業用ビデオのアクセス数、および実践後に実施したアンケート調査の結果をもとに、本実践の成果と課題を探る。

発表4：ピア・フィードバックを活用したライティング指導

発表者：奥田利栄子（広島大学・広島修道大学 非常勤講師）

Intermediate-levelのwritingクラス（5クラス）でpeer feedbackを活用した授業を実施した。学生はタイプの異なる数多くのwriting taskに取り組み、in-class writingについてはその作品をグループ内で回覧し、outside assignmentについてはorganizationに焦点を当てたpeer feedbackを実施した。ピア活動についてのアンケート結果と、writing fluency (timed writingでの産出語数で測定) の測定結果を基に、実践の効果を考察する。

発表5：The American Heritage First Dictionary の語義と連想について

発表者：田淵博文（就実大学）

The American Heritage First Dictionary は、5歳から8歳の児童を対象とした辞書である。制限語彙は2,000語以内で、語義が平易に定義されているが、英語を母語としていない日本人英語教師にとっても、極めて有益であると考えられる。

辞書を読むという作業は大変であるが、少なくとも私たちの世代の英語教師は『基本英語一千語』（開拓社）や『英語基本語彙辞事典』（中教出版）や『基本英語百科辞典』（研究社）の辞書や事典をじっくり読むことで学問的恩恵を受けてきていると思っている。

この研究発表では、The American Heritage First Dictionary から、紙面の都合などで21の単語を選び、その語義と例文などを吟味することによって、読者はどんな連想をするのかということに焦点をあて、発想の違いについて考えてみたい。また同時に辞書を読むという行為が、英語学習の上でいかに大切な作業であるかということについて、例を引きながら具体的に言及してみたい。

発表6：英語学習初期段階における発音到達度指標の提案—日本語母語話者のための「英語音声共通参照枠」の構築に向けて—

発表者：上斗晶代（県立広島大学）

CEFR（2001）は日本の英語教育に大きな影響を与えてきているが、音声については簡易な記述のみである。また、日本の文脈に則して作成されたCEFR-J（投野，2013）においても音声に関する記述はない。このような現状に鑑み、段階別に学習目標を設定した日本語話者のための英語音声ガイドライン（「英語音声共通参照枠」）を構築することにした。本発表は、10段階を設定した「参照枠」のうち、英語学習初期段階であるA1レベル（中学1，2年に相当）に焦点をあて、分節音の発音と聞きとり能力の到達度指標を設定し、提案することを目的とする。A1レベルの語彙における母音、子音、子音連結の種類と出現数を分析した結果と先行研究を基に、分節音の生成と知覚に関しての到達度指標をCan-Do記述文で示した。出現数上位3位を占める母音/e/， /i/， /ae/， 子音（強音節頭）/s/， /m/， /b/， 語末子音/n/， /t/， /l/， 子音連結/st/， /nd/， /nt/には日本人学習者にとって知覚、生成共に困難となる音が含まれる。これらを踏まえ、前舌母音間の識別、発音上の区別、歯茎閉鎖音・摩擦音とこれらを含む子音連結の聞きとりと発音は、英語学習初期段階において優先的習得目標と考えられよう。